

生活科研究の授業履歴と省察 (1)

安東 恭一郎

(美術科教育)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

The Transcription and Consideration of 'Life Environment Research' (1)

Ando Kyoichiro

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu, 760-8522

要旨 1999年より学部共通科目として実施されてきた「生活科研究」の授業についてその取り組みと履歴を考察する。ここでは特に初年度における授業への準備と取り組みおよび、個々の学生とグループ活動における意識の変容に注目する。そしてそこから生活科研究の成果と課題を明らかにすると共に、教員養成における授業の在り方について提言する。

キーワード 能動的な学習 複数教員授業 異教科 授業研究 大学授業 学生教育

1. はじめに

教育学部共通科目「生活科研究」では、異領域の複数教員が毎時間協働で授業を実施してきた。

現在まで生活科研究では、何よりも学生が生き生きと授業に参加し、自らの体験に基づきながら学ぶことの大切さと楽しさを実感できることを目指してきた。学生が地域や自然と直接触れ合う機会を保障するため、小豆島合宿をしたり休日を使って地域を訪ね歩いたりするなど実地体験の場面を設けるなどして、よりよい授業のかたちを模索してきた。

一方で「生活科」という未知の教育内容を授業に先立ち教員同士で学習し、それをどのような授業形態としていくのかについて討議したり計画したりしてきた。またそれに加え、毎時間の授業後に実施状況を反省し次時の授業に反映させるなどして試行錯誤を重ねてきた。本年は

生活科研究の授業発足7年目を迎え、授業形態も定まると共に学生の学習成果も蓄積ができ、生活科研究の授業イメージを教員も学生も共有化できるようになってきた。

本稿は、こうした異領域の教員によって実施してきた生活科研究の中でも特に初年度に注目する。なぜならば、初年度の授業の取り組みは以降の生活科研究の授業構成の原型になっているからである。

2. 授業科目「生活科研究」の設置

「生活科」は理科と社会を統合する形で活動や体験を重視する科目として、89年改訂の学習指導要領で新設された。そこでは社会や自然をテーマとして体験的に学ぶことをねらいとしており、92年度から小学校1.2年生でそれぞれ週3時間を充ててスタートした。

こうした流れを受けて本学部でも学部共通科

目に生活科に対応した授業科目を置くことになり、98年10月教務委員会のもとに設置された「生活科検討部会」で授業運営について協議を行うこととなった。この検討部会では学部内に生活科委員会を設置し、その構成メンバーは理科・社会・家庭・技術・音楽・美術・体育・学校教育・心理・幼児から選出されたメンバーで構成することとなった。そして、この委員会において授業を担当する実施委員を決定し、実施委員が作成する生活科関連の授業内容を協議することが確認された。

協議の結果、生活科関連の授業科目として「生活科教育法」と「生活科研究」を設置することとなった。そして、それぞれの授業について、2年生前期および後期に各1コマ2単位、計2コマを実施し、全体で4コマの授業を設置することを決定した。そしてこの決定から5年後、「生活科授業研究」が加えられ、3つの授業科目を生活科関連科目とし、現在に至っている。

本稿は生活科に対応する授業科目のうち「生活科研究」のみを対象としているので、以下に「生活科教育法」および「生活科授業研究」についてはふれない。

3. 生活科研究の授業形態

「生活科」は小学校低学年の社会と理科を統廃合する形で生まれた経緯を持つが、従来の学問領域から派生した科目ではないので、当時生活科に対応できる専門教員は大学内にはいなかった。

大学によっては生活科に対応できる教員を採用したり講座を新設したりするところもあったが、本学部では複数領域から教員を出し合うことで授業を構成することとなった。

生活科研究の発足当時、学習指導要領に示される生活科についてのイメージを提供できる教員は生活科教育法担当予定者の松本康（社会科）、西岡けいこ（教育）、および生活科検討部会長の川勝博（理科）であった。そこで生活科担当予定者はこの3名との話し合いを通して新たに設置する生活科研究の授業内容について検

討した。

この授業を開始するまで、大学の授業は一人の教員が該当専門授業を担当するか、複数の同一専門領域教員がオムニバス形式で一つの授業を担当するというのが一般的であった。

99年度より実施した生活科研究では、川勝（理科）・谷山（理科）・瀬戸（音楽）・安東（美術）の4名の異領域の教員が担当することになり、生活科のイメージの共有化について努力していくと共に授業内容について検討した。

4. 生活科のイメージを共有する

授業計画において参照した学習指導要領の生活科教科目標は、次のように示されていた。

具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

生活科では自立していくための基礎を形成していくことを目指しながら具体的には次のような学習内容を期待している。

a. 具体的な活動や体験を重視する

生活科では、身体全体を使って実際に活動し、試行錯誤していくなかで、子どもなりの思いや考えが生まれ、深まっていくことを期待している。

b. 自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわっていく活動を行う

身近な地域にふれる活動として、「まちたんけん」などの活動に代表されるように、自分たちの町に出かけ、自然やお店、人々とふれあい、地域の人々と会話したり身近な地域を振り返ることで、これまで見落としていたことに気付き、意外な出会いや驚きの場면을期待する。

c. 自分自身や自分の生活について考える場面を持つ

様々な体験や活動をしていくなかで子どもたちは、自分自身の良さに気づき、新しい自分を発見していくことができ、自分らしさを発揮出

来るようになることを期待している。

生活科では「具体的な活動や体験」を基本として学習が進められ、活動や体験を通して、人やものへの関わりを学び、様々な気づきを広げていくことが期待されていることがわかる。

生活科研究担当教員は、このような教育内容を学生が理解していくためには、一方で生活科教育法で子どもの発達と遊びや生活が持つ意味を学んだり、子どもの自然認識や社会認識、あるいは自己認識などについて事例を通して学んだりする必要性を確認した。

他方で、こうした理念を学生の教育実践力として育成していくためには、何より学生自身が生活科に求められる学習内容を体験的に学び、その意義を自覚できることが必要であると確認した。そして、生活科研究の授業においてそうした活動場面を設け、活動を反省的に捉え直していくことを学習内容としていくことを了解した。

5. 生活科研究の授業を構想する

(1) 体験型学習への模索

生活科研究担当教員にとって最大の課題は、その学習内容を授業の中でどのように具体化するかであった。

すなわち、学生が自ら地域の人々に接したり身近な自然に関心を持ったり驚きを持ったりできる活動や体験の場面は大学の授業で本当に出来るのか、という課題であった。

生活科に求められる体験型学習を実現するためには大学の教室での授業だけでは不十分であり、授業外で活動する場面を設けなければならないという考えは、早い段階から担当教員によって了解されていた。

体験型学習としては少年自然の家など既存の教育施設を利用する宿泊訓練への参加が提案されていた。この場合、宿泊訓練という大学を離れた自然の中での体験型学習については保証できるが、生活科が目指す人や自然あるいは社会に試行錯誤しながら理解を深めていくことができるかどうかの問題であった。

言い換えると、既存の教育宿泊訓練の多くは予め研修計画を提出した上で現地の施設指導員

の指示に従うことが原則とされ、集団訓練としての機能を色濃く持つこうした施設での活動は生活科学習としては馴染みにくいのではないかと考えられた。

また、生活科研究発足当時は現在のような選択科目ではなかったため150名以上の学生を一度に収容でき、その上でさまざまな自由行動を許容できるような施設が存在するのかどうかについても明確な指針を持つことが出来なかった。

これらの論議を通して宿泊を伴う体験学習を想定し、それにふさわしい施設や活動場所があるのかが焦点となっていった。

(2) 小豆島合宿の提案

自然を身近に感じながら体全体を使って行動できる場所をどこに求めるのかが議論となり、加えて学生の体験学習を教員が支援できるような、活動範囲の規制も必要であるとの考えから瀬戸内に浮かぶ離島での合宿が検討された。

できるだけ自然が豊かで観光地化されていない離島として当初「豊島」がその候補として検討された。そして、実際に合宿が可能かどうかを現地に入って調査した結果、合宿で利用しようとする民宿の許容人数を超えていること、150名もの学生が地域を探究する規模としては活動地域が限定されすぎること、交通手段が限られ、高松からの往復にかなりの時間を費やすであろう、ことなどから断念することになった。

一方で、担当教員がかつて非常勤講師として訪れた小豆島の「星くずの村」という子どもを対象とした科学実験学校の利用提案があり、検討することになった。

この施設は小豆島内海の「二十四の瞳・映画村」近辺の山中にあり、大阪の藤原学園という私塾を経営する方が開設された施設であった。開設者である藤原氏によれば、子どもの教育には自然豊かな場所で様々な体験をし、座学ではなく実験活動などを通して学んでいくことが必要と考え、そうした学校を作ろうと決意したとのことであった。そのため施設を建築するため全国の各地を訪ね歩き、その結果気候の温暖な小豆島を選んだということであった。そして、何年

もの歳月をかけて私財を投じながら小豆島に理想学園としての実験学校を設立し現在のような大規模な施設を完成したというものであった。

この学園施設での合宿が検討されるのに伴い、生活科研究担当教員3名が現地に赴き、直接経営者にこちらの教育方針を伝え、施設の利用可能内容や利用料金および安全設備について確認を行った。そこは山中を切り開いた広大な敷地にさまざまな理科実験ができる施設を準備し、校庭や集会場など学校規模の施設を有する子どもの一大実験学習体験施設であった。この施設は私設でありながら商業目的ではなく、教育目的として充実した内容を有しており、その経営理念もまさに生活科が目指す体験に基づきながら生活上必要な技能や自然の法則に目を向けていけるよう配慮された施設であった。

現地に赴いた教員の報告を討議した結果、小豆島合宿を前提とした授業計画を構想することになり、授業シラバスの検討に入ることになった。

(3) シラバスと授業形態の検討

合宿での体験型学習を構想する一方で、必修科目でありながら合宿費用を請求することが出来ない場合や、日程の都合上前期合宿に参加できない場合も考慮して、後期は大学内での通常時間帯を利用した演習活動との二場面を準備することとした。

合宿は「不思議発見体験学習」と名付け、合宿に向けて学生の興味関心に基づく行動を喚起し、当日の行動予定を立案させるとともに、当日の自由行動の成果を合宿最終日に発表すること、および合宿後は体験をグループ単位と個人とでまとめて冊子とすることとした。また、合宿前後の授業は生活科研究担当教員が毎回全員で授業をするが、合宿当日は学生の安全指導のため関係教室からの教員の応援を依頼することとした。

6. 小豆島「生活科研究」合宿の実施

(1) 合宿に向けた学習内容

99年度生活科研究の前期に受講を希望した学生数は127名であり、合宿に向けた学習がス

タートした。

学習の段取りとしては大まかに、「個々で小豆島合宿で取り組むテーマを考える」「テーマ追究に必要な資料などを収集する」「テーマを出し合い、興味や関心の近い者でグループを作る」「グループごとにテーマを絞り込む」「テーマに基づく事前学習を行う」といった段階と内容を授業として予定した。

こうした段取りを学生に対して説明し実施する一方で、担当教員から「そもそも合宿の事前に出会いや体験を計画し、それをもとに行動することは生活科の趣旨に反することにならないか」といった意見も出された。体全体を使って自然や人との出会い、そうした体験の驚きや楽しさ自体を活動内容とする生活科には計画的な学習はふさわしくない、とする意見であった。

事前の準備なしに小豆島に行き、そこで自分のしたいことをする。あるいは何もしたくなくても何もしないでもよい、という提案は確かに魅力的ではあった。計画をしないで、小豆島に宿泊所からぼんやりと空を眺めて一日過ごした時、私は何を考えたのか、といったことをテーマにして発表する、という考えであった。担当教員のこうした意見は、しかしながら事前学習そのものを成立しにくくさせる提案でもあった。

担当教員同士での討議の結果、学生たちに対して「基本的に事前に準備し、テーマを絞り込み小豆島での探究活動を計画することとする。ただし、実際に探究活動を開始した場面で予定しない人と出会ったり予期しない自然との出会いがあったりして、興味・関心が変更していくことは十分あり得ることである。そうした場合は計画内容とは異なる活動をしていく」ことを活動内容とすることを指示した。

(2) テーマの決定と実行委員会の結成

個々のおおよその探究テーマが決まり始めた時点でグループを編成していった。また、130名近くの学生が三日間（金曜日午後から日曜日午後まで）の合宿生活を円滑に進めていくため、生活科研究受講メンバーの中から実行委員会を結成することとした。実行委員会メンバーは各

研究室から代表を出すことを原則として、17名で結成した。

出発までに決定したグループのテーマと人数は以下の通りであった。

- a. 海水から塩作り……3名
- b. 花火とアイス作り…7名
- c. 小豆島観光巡り……9名
- d. 自然観察……………7名
- e. そうめん作り……10名
- f. 天体観測……………14名
- g. のんびり……………8名
- h. 水辺で観察……………5名
- i. マラソン……………1名
- j. 二十四の瞳……………5名
- k. 周遊……………6名
- l. 釣り……………14名
- m. ウォーキング……4名
- n. 体を動かす……………13名
- o. ハーブの研究……6名
- p. ドライブ……………13名
- q. 海で遊ぶ……………2名

これらグループ毎のテーマに沿って、事前準備をし99年5月28日～30日の小豆島合宿へと向かった。

(3) 小豆島合宿の日程と行動内容

小豆島合宿のおよその日程は以下の通りである。

1日目：金曜日授業終了後17時高松港集合、草壁行きフェリーに乗船する。草壁港から合宿場所まで貸し切りバスにて移動。一部自転車。19時頃「星くずの村」合宿所到着。到着後オープニングセレモニー。解散後に各宿舎に移動。宿舎は第9宿舎まであり、各グループで明日からの行動予定を最終確認する。

2日目：8時朝食。食事終了後、昼食の弁当を受け取る。各グループごとに活動開始。教員は担当のグループと連絡を取り合いながら現地に向かい進行状況を確認。場合によっては行動内容の相談を受ける。18時にはグループ活動を終了し、星くずの村に全員到着。その後夕食。夕食の場面でグループ毎に本日の活動について簡

単に報告発表をする。夕食後、グループごとに明日の研究発表に向けてプレゼンテーションの準備をする。教員は、各グループの準備にかかわり、発表の方法やプレゼンテーションの工夫について支援する。この作業は深夜まで続く。

3日目：8時朝食。9時、グループ発表、一グループ持ち時間15分。12時昼食休憩。13時、発表再開。発表終了後宿舎清掃。エンドセレモニー。現地解散。

学生たちはそれぞれが予定した活動計画に沿って2日目の終日活動した。その成果は3日目のグループ発表で提示されたが、高松に帰った後再び自分たちの活動を振り返りレポートを作成した。レポートの内容は「合宿に行く前に考えたこと」「合宿で一番楽しかったこと」「次に合宿があったら何をするか」「全体の感想」の四項目であった。以下、この提出レポートに書かれたものを参照し学生の意識の変容を見ていくこととする。

(4) 学生個々の意識の変容

a. グループ活動を始める前

多くの学生が「テーマは自由で何をするのかは自分で決定しなさい」という提示に迷いと不安を感じていたことが読み取れる。「・・・ある一定の範囲が決まっていれば、その中から(テーマを)ピックアップすればいいが、全く何も規定がない中で自分で決めなければならないのは結構困るものだ・・・(a. 海水から塩作り)」「・・・合宿をすると聞いたとき、中高で経験したキャンプファイヤーだとか飯ごう炊きだとかと思った。ところが、とにかく自由だとか、すべて自由にしてよいと言われて、いいのだろうかと思った。今までそんなふうになんかしてもよい合宿はしたことがなかったので・・・(f. 天体観測)」「高校までの宿泊研修では、もともと決まっている計画に従って行動していたが、この合宿は全く違っておおまかな予定しか決まっておらず、本当に自由なものであり、最初は不安な気持ちの方が大きかった。規制が多いのはつまらないが、ここまで規制がないとどこまで許されるのかわからない・・・(g. のんびり)」「・・・

何をしてもかまわないということで、本当に授業が成り立つか少し心配だった。また具体的に行動計画を決めていた班は少ないようだったので、いい加減な発表会になるだろうと思っていた（h. 水辺で観察）」

また、グループ編成の方法が、同じ研究室同士とか仲良しではないことに不安を感じる学生も多くいた。すなわち、この合宿では各自でおおまかなテーマを決定してから、テーマの内容が近い人でグループをつくるといった編成方式をとったので初対面でのグループ活動となった場合も多かったのである。

「・・・行動する班を決めたとき、自分は教育学部にいたにもかかわらず初対面で名前も顔も全く知らない知らない人と同じ班でうまくやっっていけるか不安でした（1. 釣り）」「私たちのグループは普段からよく話をしたことのない人もいて少々不安でした。・・・楽しく一緒に実験・研究ができるかが私にとって不安でした（b. 花火とアイス）」

合宿出発前の学生は、従来の合宿のイメージと大幅に異なる状況設定にとまどっていたことがわかる。すなわち「引率され、行動が予め決定され、全体行動を優先する」といったイメージが合宿の経験から導かれていたのである。学生自身、生活科という経験を小学校時代持たない中での生活科研究合宿は二日目を迎え、グループ活動を開始した。

b. 合宿を通して心に残ったこと

きちんとした指示を出さず頼りになりそうにない教員たち、あいまいな計画しか立ててこなかった自分たちのグループ、あまりに開放的な時間設定、など不安ばかりのスタートであったが、活動が始まるとしだいに不安感は薄らいでいく様子が見える。

次の学生の場合、合宿を通して合宿の意味を考えようとする「・・・合宿が終わりに近づいてきて、だんだんこの合宿の目的が分かってきたように思う。何もないゼロからの状態から自分で考え、行動し、たくさんのことを感じ取っていく力を身につけることではなかっただろうか・・・束縛されない、というのも自分の考

えや気持ちが遮られることなく自由に成長していけるためだったと思う（d. 自然観察）」

また、計画や予定のない行動をしていく中で、次第に自然や時間を感じ取っていく学生の姿も見られる「・・・自転車の旅は最高に楽しかった。景色を見ながら語ったり、海岸があるとふと自転車を止めて素足になって水の中で遊んだりした。私達は一つの場所で一つのことを集中的に学ぶことはできなかったが、みんなで冒険しながら知らない島を探検し、自然の中で子どもの頃に戻ったように遊び、日頃体験できない私たちが忘れかけていた感覚を取り戻すことができた（c. 観光巡り）」

初対面同士によるグループ編成も多かったが、活動を通して心を開いていく楽しさを発見する学生は次のように述べる「・・・意外なつながり（友達の友達だったり）があったり、同じ目的で共に行動していると、同じものを見て驚いたり共感できたりすることがいろいろとあって不思議といい感じになれることを実感しました。

二日目の活動を通して学生達は高松で過ごす日常とは異なる時間を過ごせたことを実感し、計画に基づかない行動をすることで、自然の中に身を置いて時間を過ごすことができたようである。



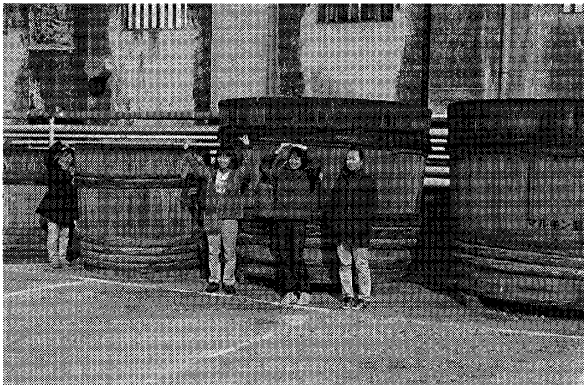
（友だちと自転車で散策する。2001年度秋合宿）

（5）学生が小豆島合宿から学んだこと

生活科研究で目指す学生の学びは「自ら地域の人々に接したり身近な自然に関心を持ったり驚きを持ったりできる活動や体験の場面で持つことができること」であり、「その経験を発表しレポートに残すことができる」である。

a. 地域の人と出会う

学生の提出したレポートからは小豆島合宿の体験については肯定的で有意義な時間を過ごしたことがわかる。一方、生活科で期待する地域の人々とのふれあいから新しい発見をするといった場面を積極的に持っている様子はあまり多くない。学生たちは小豆島の合宿を通して普段あまり話すことが出来ていない友だちと時間を気にせず深い話が出来たことを有意義であったとしている。また、話をしたことがなかった学生同士が活動を通して仲良くなれたことを喜ぶケースも多かった。学生たちは合宿期間中、これまで学生同士で話を深くしてこなかったことに気付いている。「・・・私たちは入学してから1年間はお互いのことを知らなかったので、同じ研究室になってもいつも一緒にいるということはなかった。しかし思いがけずこのような機会が巡ってきて、一日目の夜は男子も混ざってみんなで言いたいことを素直に話し合った。それは深夜まで続きお互いのことを知る良いきっかけとなった・・・」



(醤油工場を訪ねる。2001年度秋合宿)

地域の人との出会いとしては数名の学生が「星くずの村」経営者である藤原氏を出会いの人としてレポートしている。「・・・この合宿に行くまで私は先生になることをあきらめていました。ずっと先生になりたくて教育学部に来たけれど、採用の少なさという現実を目の当たりにして正直自分の気持ちに自信が持てなくなっていた。でもこの合宿を通して藤原先生と出会ってもう一度頑張ってみようと思った」「星くずの村の園長先生がスーパー人間だったことに驚いた。すごく若々しくて生きていることが

嬉しくて仕方ないといった様子を見て憧れるものがあった。・・・もしまた今度ここを訪れる機会があれば、まず園長先生のお話をもっと聞きたい・・・」

学生たちにとってこの小豆島合宿での人との出会いは地域の人々に先立ち、いつも大学で接している筈の友だちであった。「5月29日の合宿の夜に同室のAさんが誕生日を迎えたので誕生日パーティーをした。ギターとウクレレでバースディーソングを歌い、ささやかなプレゼントをした。私は小さい頃に誕生日会をよくしていたのだけれど、こんな風に大学生になって祝ったり、祝ってもらうことは特別嬉しく感じた。・・・本当に友達は素敵だなあと思えた。一日自転車に乗って冒険し、仲間と遊び、仲間と語り合っ、私はとても身近にみんなを感じることができたし、心が温かくなった。勉強している時とはまた違ったみんなを感じることができた」

地域の人と出会うことから新たな発見をする、という当初の目的に達しているとは言えないが、学生たちは人と出会うことの驚きと喜びについては意義ある体験をしていると言える。

b. 自然と出会う

学生達のレポートは、小豆島の自然について詳細に語ろうとしたり驚きを感じたりといった、積極的な関わり方をしているものは少ない。「自然観察」をテーマとして選んでいるグループがあるが、このグループは当初「押し花」を作ることを計画していたのだが、現地には意外にもその対象として計画していた花がほとんど見つからなかった。このグループは急遽ヨモギを採集してヨモギ団子を作ることにし、ヨモギ団子作りの体験をレポートしている。このグループはその出来事を次の様に述べている「昔、ヨモギ団子を作って食べたことがある、という一言から話が盛り上がり、実際に作ってみるようになったのだ。計画にも入っていなかったし、全く考えもしていなかった分、すごくインパクトのある出来事となった。その辺に生えているヨモギを摘んで団子にして食べるということには少し抵抗があったのだが、作ってみると

意外に簡単でおいしい団子を作ることができた。このことで現在の生活と自然との間の溝みたいなのが埋まって、とけ込んだような気がした」



(赤い実を見つけた。2001年度秋合宿)

小豆島の自然の中で活動する学生たちは、自然に働きかけていくことで感動や発見をするのではなく、むしろその自然の大きさにやさしく包まれることに安心感を覚え喜びを感じている様子がレポートから見えてくる。「・・・海の近くに住んだこともないし、海に行った経験もあまりなかったので、透き通った青い海を目の前にすると、本当に素直にきれいだなと思えた。そして自分の心の中も海のように大きく広くなった気分だった。あの海は一生忘れないだろう・・・」「・・・ぽかぽかとした天気の中を地元の人に道を聞いたり、少し迷ったりしながらゆっくり歩いたのは気持ちよかった。全然分らない階段を登っていたら、すごくきれいな景色が広がっていた時などは本当にうれしかった・・・」

見知らぬ自然に触れ、じっくりとそれを味わうことで学生たちはこれまで見過ごしてきた自然に愛着を感じるようになってきている。学生達は自然を研究対象として捉えるのではなく、自分との関わりから感じているのである。

7. グループ活動の状況

(1) 初年度合宿のねらい

異領域複数教員による合宿体験による授業実施は、生活科の教育目標を体験的に学ばせることを目指したものであった。すなわち生活科研究担当教員はこの合宿での体験によって「具体的な活動や体験」を小豆島での一日体験活動で保証し、そこで「自分と身近な人々、社会及び

自然とのかかわりに関心をもつ」ことを活動の内容とし、その結果「自分自身や自分の生活について考える」ことをねらいとした。

合宿事前準備では小豆島合宿での体験活動でどのようなテーマを持って活動するかについて計画し必要なものがあれば準備することをその内容とした。また、計画に先立ち「現地に出向いたとき、そこで計画に従った行動を開始するが、人や自然との出会いを通して興味や関心が変わった場合は、ためらわず予定を変更していく」こととした。そのため計画は大まかなものとし、綿密な行動予定を立てないことも指示した。学生たちは未知の場所に出向くにあたり十分な計画を立てないことへの不安もあったが、行動を開始後その予定を変更し、その柔軟性ゆえに上記のねらいに近づいていくグループも多く見られた。次に各グループがどのように計画を変更していったかを見ていく。

(2) グループの行動計画の変容

それぞれのグループが計画した内容は様々であり、活動計画を変更した状況を見ると、テーマそのものを大きく変化させたり、活動方法を小変更したり、あるいはテーマ自体が大まかなため変更とは言えないものなどそのレベルは異なる。以下に計画を変更したグループの一部を取り上げその具体的状況を見ていく。

・海水から塩作り

このグループは「海水をくみ取り、それを一日天日で干して塩を作る」という計画であった。ところが実際にはそのようなことで塩作りができないことがわかり、鍋で海水をわかしたり、それを濾過したり、さらに塩を炒ったりなどという過程を経て塩を完成させている。当初はただ天日に任せておけばあとは遊んで過ごすだけという計画は簡単に崩れ、合宿所の施設を借り先生方の知恵を借りて苦勞の結果2リットルの海水から55グラムの塩を精製している。

このグループは当初の塩作りという計画を達成するためには自分たちの知恵だけではたどり着かず周囲の人に助けられることのありがたさを実感している。

・観光巡り

このグループは小豆島の観光地の幾つかを巡るといっておおまかな計画をたてているが、その巡り方の詳細については未定のまま出発している。

詳細な行動予定を立案しない観光地巡りであったので、目的地までの交通手段や観光地情報について現地の人に聞き取りながらよりよいコースを決定し、それが活動の楽しさになっている。

このグループが予定を大きく変えた場面はオリブビーチから渡し船に乗って対岸の二十四の瞳映画村に行こうと海岸に行ったところ、その波打ち際で遊ぶことに夢中になり裸足になって皆で水遊びをしていることである。

現地の人からさまざまな情報を得ることが地域を味わう貴重な経験となること、観光地巡りにこだわらないことが新たな場面や自然との出会いとなることを実感している。

・天体観測

このグループは施設にある天体望遠鏡を用いて天体を観測する、という計画で移動場面も想定されていないため、予定変更として想定できるのは天候不順による観測対象の変更程度であった。

天体観測は夜が中心になるため、昼は寝て待つことを予定していたようだが、当日朝になって周囲のグループがそれぞれ宿舎を出発する場面に遭遇し、予定にはなかったが急遽二十四の瞳・映画村まで歩いて行っている。6キロ程度の道のりは想像以上に遠かったようだが、その歩いている中でグループの知らない人同士と話ができたり、想像していた以上に海の景色がきれいであったことに気付いている。

このグループは予定していた天体観測については詳細なレポートを提出しているが、それ以上に全く予定していなかった昼間の活動で友だちや自然との出会いを印象に残る活動として記録している。



(活動開始朝、おおまかな行動予定を確認。2001.秋)

・二十四の瞳

このグループは「二十四の瞳・映画村」を訪問し、そこで映画を見るなどして今と昔の教育制度の違いや教師と生徒とのふれあいなどを考えることを目指していた。映画村では予定した行動をとったようだがそれほど感銘を受けている様子はない。

予定より2時間も早く宿舎に帰ったこのグループは、待機していた担当教員に誘われて宿舎の前に広がる海岸で潮干狩りをするようになった。レポートによればこの体験が一番印象に残っているようで、初めての潮干狩りを通して自然を全身で感じたり、偶然居合わせた現地の人から貝を分けてもらったうれしさなどを記述している。また、潮干狩りに誘ってくれた教員が何をするともなく岩に座ってじっと海を見つめている姿を不思議に感じている。

当初、教育制度の変遷について探究するつもりであったこのグループは、予定しない潮干狩りでの体験が強烈で、自然とかかわれたことに感動している様子がわかる。

・ドライブ

小豆島をレンタカーを借りて観光地巡りをするというこのグループは、計画通り「お猿の国」「孔雀園」「オリブ園」を回っている。

このグループが一番印象に残った体験をしたのはレンタカーで観光地を巡ったことではなく、むしろ車を返してから立ち寄った海岸で遊んだことであった。

「・・最初は足だけ海に入れて写真を撮るつ

もりだったのに、写真を撮り終えてから私たちの行動はエスカレートしていった。水のかけ合いで服はずぶぬれになり、服を着たまま海に入って泳ぎ、気が付いたら貝を足でふんで擦り傷だらけだった。足から血は出るし寒いし悲惨だった。でもこれが一番の思い出」また、このグループの別の学生はこの体験を次のように振り返る。「・・・生活科研究という意味は、日々の生活の中で、誰かから教えられることもなく、自分の力で何かを発見したり疑問を持ったりし、それをとことん満足のいくまで追究し、自分の知識として身につけていくこと、またその過程にあるのではないかと思う。私たちの場合、自分たちが楽しいと感じること、やってみたいことを海で発見し、足が血だらけになるまで夢中で遊びきったのだけれど、自分の興味ある対象を見つけてとことんやりつくしたという点で、この意味に当てはまっているのではないだろうか」「・・・いろいろなことをする中で、今回のように夢中になれる対象を見つけたいと思う・・・教師から生徒へ一方的に知識を与える形式の授業が多い実状の中、こういった力をつけていくことを目的にした授業を大切にしていくなきゃいけないと考える」

今回参加したこの学生にとって、これまで学校の授業とは、教師によって目標や課題が与えられそれを達成し獲得していくことであった。この合宿での体験を通して、学生はそうした授業の形態では行き着くことのできない世界を味わうことができたのである。



(活動体験を最終日発表する 2001年秋合宿)

8. 初年度生活科研究の課題

異領域の教員が構成し企画した「生活科研究・小豆島合宿」は、予めテーマを決定し実際の行動では自由にその計画を変容させていく、といったものであった。

何でも自由にして良い、という学生への提案はこれまで見てきたように、学生に戸惑いを与えながらも充実した体験を可能にするものであったと言える。

しかしながら、こうした授業を実施する場面では、次に述べるようないくつかの問題点も指摘された。

a. 安全面の確保

初年度は、行動場面での交通手段として自転車・原付・自動車・バス・タクシーなど学生が希望するものは全て可能とした。このような在り方は学生の安全面で保証ができないのではないかという意見があった。

b. 授業構成について

合宿の活動予定が全く自由である、というのは受動的な学習態度を能動的な学びの大切さに気付かせるには効果があった。その一方で学校教育における生活科では、たとえば「自分たちの町に出かけ、自然やお店、人々とふれあい、地域の人々と会話したり身近な地域を振り返ることで、これまで見落としていたことに気づき、意外な出会いや驚きの場면을期待する」といった学習内容が想定されている。

生活科研究では学生が教師になった時、こうした学習指導要領に示される内容と対応した活動をしておくべきではないか。

c. 責任の所在

3日間の合宿での成果を基本とする授業構成は、指導する教員にも大きな負担を強いるものではないか。また学生・教員の事故や病気などの責任の所在が不明確ではないか。

d. 費用負担の問題と前期・後期の授業形態

初年度は必修科目であったが、次年度以降生活科研究は選択科目となった。選択科目になってから受講希望者は半減し、受講しない理由として合宿費用の負担が大きいことがわかった。

受講を希望しても費用負担の大きさから受講を辞退しなければならない学生に対しては、合宿をしない生活科研究を準備した。しかし、合宿をする場合とそうでない場合とでは学習経験に大きな差があり、この差を埋める授業を準備できなかった。

9. 2000年度以降の生活科研究の取り組み

2000年度以降現在に至るまで担当者会議によって、先に述べた初年度の課題に対応する改善策として以下のような取り組みを行った。

a. 安全面の対策

合宿の体験活動での交通手段は公共の乗り物を利用することとする。ただし自転車の使用は認める。

b. 授業構成

生活科研究の授業でも生活科学習指導要領に示される学習内容を踏襲することとする。従って、計画の変更は可能であるが、学生グループの計画に先立ち、地域や人とのかかわりや自分自身の生活について考えるなど、大まかな計画方針を伝え、それに基づく研究とすることとした。

c. 責任の所在

学生の安全保険については事前に生協の保険に任意加入を促し徹底する。教員の交通費・宿泊費などについても学務委員会を通して請求する。

d. 費用負担の問題と前期・後期の授業形態

小豆島での合宿を基本とする生活科研究は2002年度まで継続した。その一方で合宿を組まない学期で高松市を活動範囲とした探究活動を実施してきた。2003年度以降は合宿をやめ、前期および後期共に高松市とその周辺を活動範囲とする探究活動に変更した。この授業では、毎週の授業に加えて土日を中心として加え、大学で作業・発表会を行うという形態とした。学生の費用負担は公共の交通料金だけとなった。

10. 教員養成における授業の位置付け

2000年度以降の生活科研究の授業構成は初年

度に比べれば前述のように学生の自由度は減り、現行の学習指導要領に示される学習内容に準拠したものに移行している。2003年度の生活科研究の授業状況と評価については別稿にゆだねるが、問題は生活科研究で学生の何をどのように育てるのかについて曖昧さが残っていることである。言い換えると、大学教員養成で教員免許状に関わる授業と学習指導要領が示す教育内容との関係をどのように捉え大学の授業としてどのように構成するか、という点について今後明確にしなければならない、ということである。

99年から取り組んできた生活科研究の授業を俯瞰すると、綿密な行動計画を立てて探究活動する場合も、ほとんど計画無しで活動する場合も、それぞれの成果を期待できることがわかる。特に、初年度生活科研究での学生たちは後者の場合での成果を示したものであった。

ところで、学校教育を通してわれわれが学んできたのは、どちらかといえば前者の態度を持つことであった。すなわち課題となる現象を前にして、その問題解決を目指す場合、対象を見定める予めの観点を持って分析的に捉え、対象が何であるのかを言い当てることが大切であると教えられてきた。

ところが、現代社会で起こる諸現象は複雑で、既成の観点や理念だけでは説明できなかったり、解決できない課題が散見されるようになった。こうした社会では理念や観点に先立ち、まず現象そのものを受け入れ見つめていく態度が求められる。すなわち予見を持たないことから新たに見えてくることを捉える力こそが課題を解決していく手がかりになるのである。

生活科が設置された背景には、こうした混沌とした社会を乗り越えていく力として、受動的な学習に依拠するのではなく、自ら発見し考えていく態度を基礎的な力として育成しようとするねらいがある。

現在の教育現場が求める教師は、これからの社会を新しく推し進めていくことができる能動的な子どもたちを育成することである。

大学の教員養成に関わる授業は、既存の学問体系を学生に伝授するだけでは、力量のある教

師を育成しているとは言えない。すなわち、大学教員個々の学問イメージで授業をしていくのではなく、学校教育における教育目標と教育内容は学習指導要領によって示されるのだから、その関連において説明されなければならないだろう。そして、その上で学生にどのような力量をつけることをねらいとして授業を構想するかを検討しなければならない。

11. おわりに

大学における講義が、学問体系を解説し伝えていく場面として位置付けることが出来るのなら、一人の専門領域の教員が一つの授業を担当することで十分であろう。しかしながら、学生の学習態度の育成や変容を期待する授業の場合、複数教員によってそれらを確認していくことが求められる。一人の教員が学生に対して働きかけをする一方で、別の教員は学生全体の学びの状況を見取り、さらに別の教員が個々に学生と関わることで具体的課題を明確にできるのである。

生活科研究は予め意図して異領域・複数教員によって実施する授業体制をとったわけではなかった。しかし結果的にはこうした体制によることで、授業における目的が学習内容の伝授ではなく、生活科で期待する能動的な学習態度を育成することに関心が集まった。すなわち、生活科研究のシラバスは前年度を参照しながら計画されるが、学生の能動的な活動を促すことを

軸として毎時間実施した授業は見直され、また受講する学生の状況（たとえば受講履歴あるいは受講者数）によって対応を変更することも可能になったのである。

こうした考えにおいて普遍的で理想的、あるいは完成された授業というものは存在しない。受講する学生が変われば授業の構成も変わる。また、学校教育の状況の変化も反映させていかなければならないだろう。一方、学習内容や方法が変容しても、学生が能動的な学習態度を身につけ、自らが学びの場を拓けようとしているか、といった学生の成長を期待する眼差しは不変である。

参考文献・参考資料

- 改訂小学校学習指導要領の展開 生活科編
・嶋野道弘
1999年・生活科研究レポート集
香川大学教育学部
2000年・生活科研究レポート集
香川大学教育学部
2001年・生活科研究レポート集
香川大学教育学部
2002年・生活科研究レポート集
香川大学教育学部
2003年・生活科研究レポート集
香川大学教育学部
2004年・生活科研究レポート集
香川大学教育学部